

雜 錄

目 次

新刊雜誌記載參考記事目次……………457
 外國特許抄録……………460
 雜 報……………462

○大東亞戰爭日記摘要○各國時局情報○工業
 品規格統一調査會における3月中に開催の委
 員會並にその議題

新刊雜誌記載參考記事目次

1) 製鐵原料

- 浮游選礦劑に於ける起泡性と化學構造との關係に就て 堀内利器・藤堂信義・岸 喜家 工化誌 45(昭17)291
- 抵抗傾度測定に依る新しき電気探礦法に就て 藤田義象 鑛業會 58(昭17)125
- フィリッピン滿侖鑛事情 市川弘勝 鐵鋼統制 2(昭17)7
- マレイ半島タマンガン鐵鑛山の開發と其の鐵鑛石に就て 松島喜市郎 鐵鋼統制 2(昭17)21
- ソ聯東部の鐵鑛, 石炭資源に就て エム・ローゼンベルク 鐵鋼統制 2(昭17)28
- 比律賓に於ける鐵・滿侖・クロム鑛資源(III) 上治寅次郎 採治 20(昭17)87
- 朝鮮螢石鑛床の開發に就て 宮澤俊彌 朝鑛業會 25(昭17)55
- 朝鮮に於ける水鉛鑛床の鑛床地質的考察(1) 近藤忠三 朝鑛業會 25(昭17)141
- 東亞共榮圈に於ける南洋の地質と地下資源I(解説) フィリッピン群島 三本杉巳代治 朝鑛業會 25(昭17)132
- 電気探礦の理論的考察 清野武 電評 30(昭17)145
- 南方資源と其の開發方式 光木耿二 ハガネ商聯 4(昭17)3號 58
- 共榮圈諸國の鐵鋼需要 山崎朗水 ハガネ商聯 4(昭17)3號 11

2) 耐火材並に燃料及び驗熱

- 窯業時評(6) 永井彰一郎 窯業會 50(昭17)145
- 珪石煉瓦の比較研究(2) 不破橘三・伊藤集湧 窯業會 50(昭17)148
- シヤモット煉瓦の耐熱性に就て(1) 山内俊吉・加藤左織 窯業會 50(昭17)152
- 未燒成窯業素地の膨脹並に收縮測定(資料) 加藤左織 窯業會 50(昭17)170
- 耐火煉瓦のパネル試験法規格(資料) 平田二郎 窯業會 50(昭17)176
- 炭化珪素と其の耐火物としての利用(資料) 佐藤純夫 窯業會 50(昭17)178
- 金屬代用陶磁器に就て(雜錄) 梶原政次 窯業會 50(昭17)187
- 日本の磁器と透過(雜錄) 西山貞 窯業會 50(昭17)189
- 南洋の燒物業(雜錄) 熊澤治郎吉 窯業會 50(昭17)190
- 第1回陶磁器特別委員會記録(雜錄) 窯業會 50(昭17)191

- 米國のマグネサイトに就て(雜錄) 梶原政次 窯業會 50(昭17)193
- ガラス纖維岩綿及び鑛滓綿の研究業績概要(續) 窯業會 50(昭17)附73
- ピッチの高温に於ける比熱と比重に就て 海野三朗 製鐵研 178號(昭17)206
- 燃料の話(講話) 小松茂 製鐵研 178號(昭17)3
- 東印度諸島地域別産油量・各地域油田別産油量 水曜會 11(昭17)4
- 珪石煉瓦の配合粒度に就て 四方田潤二・荒木寛 耐火材 33號(昭16)115
- 珪石煉瓦に於ける燒成回数の影響 高良義郎・江崎光義 耐火材 33號(昭16)120
- 新製品不燒成フォルステライト煉瓦の研究(翻譯) 井木實 耐火材 33號(昭16)126
- 珪石質耐火物に就て 高良淳 耐火材 34號(昭16)135
- 丹波珪石の變遷に就て 加藤昇次 耐火材 43號(昭16)156
- 昭和15~16年の耐火物工業 上木正二 耐火材 34號(昭16)176

3) 銑鐵及び合金鐵の製造

- 熔鑄爐ガスの煙塵量並に水分量に就て 福本二男 製鐵研 178號(昭17)191
- 高爐に於けるコークス消費量の豫備計算(輯録) 吉川公治 滿冶金會 32號(昭17)55
- コークス工業に於けるアンモニア回收法最近の進歩(II) 飽和器の構造 八田八郎 化學機 6(昭17)15

4) 鋼及び鍊鐵の製造

- 製鋼法の物理化學的研究(講義) 柴田善一 金屬會 6(昭17)82
- 鋼の脫酸に就て(1)(講義) 益田義三 製鐵研 178號(昭17)123
- 鋼浴に於ける反應 $FeO+C=Fe+CO$ の速度恆數の決定法と鹽基性電気爐酸化製鍊の一考察 澤村 宏・何澤 明 水曜會 11(昭17)37

5) 鐵及び鋼の鑄造

- マン型内火機械入籠の鑄造並に材質と Mn の影響に就て 長光二 鑄物 14(昭17)15

鑄物收縮率に就て(第1報) 稻田貞俊 機械會 45(昭17) 230

6) 鐵及び鋼の加工

滲炭層の熱處理に關する一實驗 門間改三・橋本康一 愛知時計電機研報 6(昭17) 1

軌條の話(1) 中島龍一 鐵鋼統制 2(昭17) 39

鑄鐵及び鑄鋼の熔接(1) 柴田晴彦 九鐵會 3號(昭17) 108

滲炭及び窒化 渡利彦四郎 金屬 12(昭17) 217

焼入讀本(2) 高瀬孝夫 金屬 12(昭17) 267

全熔接高圧ボイラー罐胴の製作に就て(2) 土光敏夫・中村素 機械と材料 78(昭17) 182

鋼の熱處理 澤 文三郎 機械と材料 78(昭17) 205, 252

分塊壓延機 高梨樹一・藤木久直 石川技報 5(昭17) 81

引拔加工の研究 錦織清治・柳沼 隆 電製鋼 18(昭17) 137

7) 鐵及び鋼の性質並に物理冶金

鋼の恒温變態に及ぼす諸元素の影響(第I報) 村上武次郎・今井勇之進 金屬會 6(昭17) 145

鐵合金の耐酸性(第7報) Fe-Cr-Mo系合金の耐酸性 村上武次郎・小泉三郎 金屬會 6(昭17) 150

脱炭に依り生ずる地鐵粒の形狀に就て 持田徳彦 金屬會 6(昭17) 171

鋼の結晶粒度と諸性質(I)(講義) 村上武次郎 金屬會 6(昭17) 75

耐高温度強力鑄鐵に關する研究(VII) 齋藤豊三 水曜會 11(昭17) 61

CNS鋼に就て 渡邊正 中島研報 7(昭17) 19

熔融金屬及び滓の粘性及び流動性測定法及び装置に就て(VII) 森田志郎 採治 20(昭17) 131

不銹鋼の實用金相學(IV) 津田昌利・田中正巳 採治 20(昭17) 137

高速度鋼に關する研究(2) 錦織・林・太田・我妻 電製鋼 18(昭17) 115

工具鋼の熱處理 岸本 浩 金屬 12(昭17) 247, 367

代用電熱線の趨勢 竹村旗夫 金屬 12(昭17) 261

パーライト可鍛鑄鐵に就て 吉原幸一・清水次郎 鑄物 14(昭17) 1

X線の應力測定に對する一寄與 小島公平・森本智一 機械會 45(昭17) 152

種々の引張状態における軟鋼のX線の應力測定 西原利夫 機械會 45(昭17) 238

切欠きによる應力集中(講義) 津村利光 機械會 45(昭17) 260

ニッケルを節減せる特殊鋼 菊田多利男・森 靖 機械と材料 78(昭17) 191

材料試験機の型式とその特徴(2)(3) 吉澤武男 機械と材料 78(昭17) 197, 241

金屬の理論續編(X) 樋口傳夫 機械と材料 78(昭17) 223

金屬の表面的性質に就て(其の9) 桑原英順 石川技報 5(昭17) 104

金屬理論の發展(14) 野呂道夫 工業評 28(昭17) 4號 66

On the changes of electric resistance due to magnetiza-

tion of single crystals of iron and nickel. By T. Hirone & N. Hori. Sci. Rep. Tôhoku 30(1942) 125.

8) 非鐵金屬及び合金

金屬中に於ける價電子の勢力状態に就て(第10報) I, 10. 亜鉛諸性質異常變化の温度 佐藤充 金屬會 6(昭17) 127

復元現象より見たる常温時効と焼戻時効との關係 朝倉 潮 金屬會 6(昭17) 156

冷間加工せる金屬及び合金の低温焼鈍による諸性質の變化に就て(2) 山田史郎 金屬會 6(昭17) 161

溶解時に於ける添加金屬の投入温度と凝固後の粒度 太田義雄 金屬會 6(昭17) 178

遠心力を應用する新しい冶金法(遠心冶金法) 大日方一司 金屬會 6(昭17) 179

歐米亞鉛電解製鍊場視察記 唐島 讓 鑛業會 58(昭17) 140
ニッケル・コバルト冶金の2, 3の問題 小川芳樹 鑛業會 58(昭17) 160

銅選鍊場設計上の資料(資料) 三野英彦譯 鑛業會 58(昭17) 164

マグネシウム合金の熔解及び砂型鑄物(輯録) 荻野 寂 滿冶金會 32號(昭17) 38

亜鉛電解に於ける添加劑の動作 中原行磨 水曜會 11(昭17) 5
ピストン用輕合金の研究(1) 西村秀雄・西成基 水曜會 11(昭17) 17

アルミニウム, ジュラルミン及びヒドロナリウム系(耐蝕性)合金に及ぼすチタニウムの影響に就て 西村・松本・山口 水曜會 11(昭17) 23

アルミニウム合金鑄集(II) 森直次 採治 20(昭17) 101

混合法に於ける鉛鹽の効果 採治 20(昭17) 100

熱帯地方のAl原鑄ボーキサイト 採治 20(昭17) 104

新工業用鑄物としての黄玉 採治 20(昭17) 105

金屬及び合金の收縮率表 金屬 12(昭17) 216

非鐵合金の熱處理 五十嵐 勇 金屬 12(昭17) 233

稀有金屬に就て 金屬 12(昭17) 311

マグネシウムの性質 金屬 12(昭17) 312

マグネシウムとは 島田乙駒 金屬 12(昭17) 313

マグネシウム雑話 尾木陽子 金屬 12(昭17) 315

マグネシウムの金相學 大日方一司 金屬 12(昭17) 317

マグネシウム合金の熔解及び砂型鑄物の製造 荻野 寂譯 金屬 12(昭17) 325

マグネシウム合金の鍛造, 壓延及び押出加工 若本洋之助 金屬 12(昭17) 331

マグネシウム合金のダイカスト 平賀 力 金屬 12(昭17) 337

マグネシウム合金の濕式防蝕法の紹介と最近の著者のマグベ法 遠藤彦造 金屬 12(昭17) 341

マグネシウム合金の熔接及び鋸接 大西 巖 金屬 12(昭17) 347

マグネシウム合金の性質と用途 石田四郎 金屬 12(昭17) 359

亞硫酸法に依る國産原料よりアルミナの製造法に就て 田中 弘 アルミニウム 2(昭17) A1

アルミニウム地金ガス分析法(真空熔融抽出法)に關する研究 第1報 宗宮尙行 アルミニウム 2(昭17) A4

アルミン酸ソーダ液の加水分解工程に關する諸條件の影響に就いて 鹽田正二・武藤雲晴 アルミニウム 2(昭17) A12

Al 輕合金の疲労強度に就いて 五十嵐 勇・深井誠吉 アルミニウム 2(昭17) A15

アルミニウム線の性能に及ぼすタニウムの影響に就て 鳥羽安行 アルミニウム 2(昭17) A27

アルミニウム合金のダイキャスト工業に就て(講演) 安東俊映 アルミニウム 2(昭17) A32

ダイカスト用アルミニウム合金の性質に就て(講演) 菅野友信 アルミニウム 2(昭17) A41

鑄造用アルミニウム合金及び鑄物の性質(1)(講義) 大日方一司 アルミニウム 2(昭17) A52

アルミ合金線に就て(講演) 江塚 保 電協誌 242號(昭17) 122

ケーブルの鉛被代用被覆に就て(講演) 池田敬三 電協誌 242號(昭17) 166

輕合金用點熔接機に就て(講演) 難波正孝 電協誌 242號(昭17) 171

輕合金と取扱指針 石田四郎 機械會 45(昭17) 241

特許合金成分表(2, 3) 機械と材料 78(昭17) 208, 273

金屬タンタラムに就て 東馬三郎 化學機 6(昭17) 8

Calmalloy の磁氣—溫度曲線について 西ヶ谷壽夫 マツダ研報 17(昭17) 139

硬銅電車線磨耗防止對策に關する私見(1) 瀧島常吉 カーボン評 9(昭17) 33

On copper alloys of high conductivity and high strength. By M. Okamoto. *Sci. Rep. Tôhoku*, 30 (1942) 93.

On the constitution of ternary alloys. By T. Hirone & T. Katayama. *Sci. Rep. Tôhoku*, 30 (1942) 109.

On the energy states of the valency electrons in some metals. I, 12. The mechanism of the catalytic action of zinc in the preparation of unsaturated higher alcohol by hydrogenation of vegetable oil. By M. Sato. *Sci. Rep. Tôhoku*, 30 (1942) 137.

The equilibrium diagram of the complete ternary system copper-antimony-nickel. 1st. report: The state of equilibria between the liquid and solid of the ternary system. By N. Sibata. *Sci. Rep. Tôhoku*, 30 (1942) 154.

The equilibrium diagram of the complete ternary system, copper-antimony-nickel. 2nd. report: The equilibria in the solid state of the whole ternary alloy system. By N. Sibata. *Sci. Rep. Tôhoku*, 30 (1942) 193.

A magnetic investigation of ternary alloys of the Cu-Sb-Ni system. By N. Sibata. *Sci. Rep. Tôhoku*, 30 (1942) 215.

The acid resistivity and forgeability of Cu-Sb-Ni alloys. By N. Sibata. *Sci. Rep. Tôhoku*, 30 (1942) 223.

An X-ray investigation of nickel-antimony alloys. By A. Ôsawa & N. Sibata. *Sci. Rep. Tôhoku*, 30 (1942) 234.

Anomalous changes in the α phase of the Ni-Sb system. By N. Sibata. *Sci. Rep. Tôhoku*, 30 (1942) 245.

The action of sulphur against aluminium alloys at high temperatures. T. Murakami & N. Sibata. *Sci. Rep. Tôhoku*, 30 (1942) 253.

On the energy states of the valency electrons in some metals. I, 13. The nature of the X-Ray lines appearing at the lower and upper limits of absorption edges of Zn and other elements. M. Satô. *Sci. Rep. Tôhoku*, 30 (1942) 267.

9) 化學分析

Al で脱酸せる鋼中の AlN の認知(電子廻折に依る) 徳光 直理化彙報 21(昭17) 89

鹽化マグネシウムの熔融分解電壓の研究(第1報) 生源寺・坂井・奥野 九大工學彙報 16(昭17) 215

硫酸鹽沈澱劑利用によるY合金並に類似輕合金中のマグネシウムの新迅速容量分析法に就て 松家勝男・村上周一郎 中島研報 7(昭17) 9

鋼中ニツケル分析法の改良 富田正二 日立評 25(昭17) 177

特殊鋼中の非金屬介在物判定試験に就て 野田一六・猪村稔 電製鋼 18(昭17) 159

10) 工業經濟及び政策

鐵鋼部門勞務者の賃銀規則 太田 東 鐵鋼統制 2(昭17) 1

特殊鋼新配給機構 ハガネ商聯 4(昭17) 3號 2

特殊鋼配給機構の整備要綱發表さる ハガネ商聯 4(昭17) 3號 28

鋼材下部配給機構の整備方針 ハガネ商聯 4(昭17) 3號 31

11) 雜

科學と技術と藝術 濱住松二郎 金屬會 6(昭17) 125

粉碎に關する研究 渡邊幸三郎 窯業會 50(昭17) 152

工業技術の進歩と職域講話 本多光太郎 製鐵研 178號(昭17) 1

最近の金屬工業界 金屬 12(昭17) 276

逝ける金相學の耆宿近藤眞澄博士 金屬 12(昭17) 357

戰爭下に於ける滿洲重工業の課題 松岡享一郎 鑛工滿 3(昭17) 4號 3

電氣爐工業概説(後編) 安達徳藏 電化 10(昭17) 118

國產最大容量高速度直入電動機全閉型500馬力誘導電動機に就て 新野要人 電協誌 242號(昭17) 180

時局下に於ける技術の涵養 横山勝任 機械會 45(昭17) 137

戰時下獨逸の兵器技術を視て 原 乙未 機械會 45(昭17) 139

高速精密旋盤の試作及び研究に就て 長山三男 機械會 45(昭17) 11

日本標準規格の用語に就て 吉田永助 機械と材料 78(昭17) 212

戰爭と化學工學 上田嘉助 化學機 6(昭17) 1

化學工業用無機材料の重要性 永井彰一郎 化學機 6(昭17) 2

現下の時局と化學機械 鉛市太郎 化學機 6(昭17) 11

ガス・ヂーゼル自動車 動力(別冊) 59(昭17)

關領東印度及び比律賓の電氣事業 電氣協會發行, 電氣事業資料 No. 81(昭17)

大東亞共榮圈と科學技術政策 井上匡四郎 工業國策 5(昭17) 291

南方進出とアルミ工業の躍進性 安西正夫 工業國策 5(昭17) 308

銅自給の具體策 鈴木富治 工業國策 5(昭17) 311

ソ聯邦工業機構の變遷(沿革篇) 企畫 4(昭16) 11號 1

ソ聯邦工業管理機構の概要(現狀篇) 企畫 4(昭16) 11號 23

南方政策の課題特輯 技評 第19卷4號

外國特許抄録

(「No.」は特許番號、「出」は出願月日、「許」は特許月日)

【米 國】

錫引板より錫及び鋼を回收する方法 No. 2,208,138 出 未 詳
許 1940. 7. 16

Roger T. Robinson

〔特徴〕 錫引板の錫を溶解し鋼板を未溶解状態に置く爲遊離鹽酸鹽化錫(主として第二錫)及び鹽化鐵(主として第一鐵)を含む新鮮處理液を以て錫板と接觸せしめ、但本溶液の酸化が全ての錫鹽分を第二錫型に轉換するに必要な程度を越えざる如くす。(本溶液と錫板との接觸は錫の皮層を脱離する如く調節し且溶液中の $SnCl_4$ を $SnCl_2$ に還元する程度となす。)

熔鑄爐にて鐵鑄石を處理する 出 未 詳
法 No. 2,208,245 許 1940. 7. 16

H. A. Brassert & Co. (發明者 Arthur J. Boynton)

〔特徴〕 鐵鑄石、燃料及び煤熔劑を装入せる直立爐を装入するに當り、煤熔劑の一部は鑄石と混じて爐中にて垂直に延びたる柱狀をなして装入し、且石灰の如き煤熔劑の殘部は主装入物の上部により包圍せらるゝが如くせる隣接垂直柱を成す如く装入す。

アルミニウム製活版板 No. 2,208,703 出 未 詳
許 1939. 7. 23

Addressograph-Multigraph Corp. (發明者 David Rubin-Stein)

〔特徴〕 アルミニウム板をアルミン酸アルカリの加熱溶液により處理し、脂油の痕跡を除き、表面を蝕刻し、微細孔性酸化物の層を以て被覆し、且かくの如く處理せるアルミニウムを硝酸溶液其他の如き酸性浴中に浸漬して浮渣を除き、該表面上の微細孔性酸化アルミニウムの層中に含まれたる吸収アルカリを中和す。本表面は印刻せるグリース性寫像を保有し得べく、且酸性蝕刻の適用により表面のグリースを除去し得。

鐵其他の金屬の精鍊装置 No. 2,209,153 出 未 詳
許 1940. 7. 23

Northern Steel & Wire Co. (發明者 Paul W. Dillon)

〔特徴〕 一端に於て裝入口、他端に於て排出口を有する縦に長き開頂型轉爐にして、耐火性裏附、多數の羽口、風函及び轉爐傾斜用装置をも具ふ。

銅の轉爐製鋼及び精鍊並に銅及び亜鉛を含む合金の殘滓より亜鉛を回收する方法 No. 2,209,481 出 未 詳
許 1940. 7. 30

Volf Sterental (權利の 75 は Daivide Jona, Giulio Jona 及び Raffaele Jona に屬す。)

〔特徴〕 處理すべき原料と鑄滓形成物と酸化途中に熱を發生する物質とを、水平軸上に於て傾斜し得べきレトルト型爐中に装入し、爐の裝入口を密封し、爐を水平位置迄傾け、その自由表面に於て該装入物を加熱し、装入物の一部が熔融したる際に加熱を止め、装入物中に空氣を吹込み、同時に且段々と本爐を傾斜し直す。この際金屬が熔融するにつれて、熔融部分のレベルが幾分ノズル開口を蔽ふ如くし、且噴氣中本爐より揮發性産物を回收の爲排出し冷却の傾向の存する時に本爐をその水平位置迄戻し加熱を再び始む。次に燃焼を活潑ならしむる爲空氣を吹入れ最後に装入物にポーリングを行ふ。

取 瓶 型 爐 No. 2,209,786 出 未 詳
許 1940. 7. 30

Ford Motor Co. (Russell H. McCarroll, Clinton A. Reams & William R. Powers)

〔特徴〕 その炭素量を殆ど變化せず鐵合金を連續的に熔融するに適したる爐の構造及び作業を詳述す。

ダイヤモンド工具 No. 2,210,039 出 未 詳
許 1940. 8. 6

Wheel Trueing Co. of Del. (發明者 John L. Petrie)

〔特徴〕 タングステン金屬粒及びダイヤモンドの混合物より錐、研磨輪、ダイス等を造るに際し、何等の添加結合劑及び炭素を含まざる氣中にて 2100°F を越えざる温度に於てダイヤモンドの C と W とを反應せしめ、ダイヤモンド表面上に炭化タングステンを含む強靱附着性層を形成す。

硫化鑄石及び精鑄の酸化焙燒 No. 2,210,479 出 未 詳
許 1940. 8. 6

Tenn. Copper Co. (發明者 Leon W. Booton & Roy R. Burns)

〔特徴〕 微粉化せる鑄石を相連續する焙燒室數箇を通じて連續的に供給し、之を形成される SO_2 と共に酸化性ガスの反對流を以て處理す。微粉化せる鑄石は第一焙燒室の爐床より吹離されて本室内の酸化性ガス流中に瞬間に懸浮せられ、且 SO_2 ガスは本室より連續的に抽出せらる。

滲 炭 劑 No. 2,210,622 出 未 詳
許 1940. 8. 20

Alvin R. Keil

〔特徴〕 鋼滲炭用に適せる粒狀合成品にして、微粉狀木炭、滲炭劑の非然焼を成起する大凡分量のアルカリ金屬鹽、普通の滲炭温度以上の熔融温度を持つ粘土質材料より成る。

金屬表面仕上法 No. 2,210,850 出 未 詳
許 1939. 8. 6

Curtin-Howe Corp. (發明者 Leo P. Curtin)

〔特徴〕 鐵金屬表面上に不銹性密着被覆を造る方法。先づ該表面を $300\sim 650^{\circ}\text{F}$ の或程度に於てガス狀原料に由來する酸素により適當時間酸化して、酸化鐵の薄き密着性被覆を形成せしめ、クロム酸又は可溶性クロム酸鹽及び重クロム酸鹽 (Zn, Cu, NH_4, Ca, Cd 又は Mg の鹽類)の稀釋溶液を以て該被覆を濡したる後に、その表面を乾燥す。

鋼ビレット其他の處理法 No. 2,210,921 出 未 詳
許 1940. 8. 13

Linde Air Products Co. (發明者 Homex W. Jones, James H. Bucknam & Edmund A. Doyl)

〔特徴〕 多角形断面を有する鋼ビレットの如き長大なる金屬體より表面金屬を熱化學的に除く法にして、本物體の縦方向に及び斜方向に酸化性ガス流を漸次に吹きつけながら、該表面を水平面に對して傾斜せる位置に保持す。

酸溶液よりバナヂウムを回收する法 No. 2,211,119 出 未 詳
許 1940. 8. 13

Chemical Foundation, Inc. (發明者 Arthur W. Hixson & Ralph Miller)

〔特徴〕 磷酸溶液から V の回收に於て、 V を五價状態に轉換し、iso-Pr ether の如き有機質溶劑を以て抽出す。

金屬品鑄造に適する鑄型 No. 2,211,133 出 未 詳
許 1940. 8. 13

Victor Krosta

〔特徴〕 高熔融點の金屬又は合金物品を形成し、且この種金屬及び合金の收縮を補充する爲の一定型鑄型製造法。 575°C 以下に於て

安定せるが如き形狀に於て主として石英より成る鑄型を造り、之を 870°C 以上迄加熱すれば、之により鑄型の石英は 575°C 以上に於て安定せるが如き形狀に迄膨脹により變形す。次に鑄型を充分長き時間 870°C 以上に保持し該石英を膨脹と共に鱗石英 (tridymite) 又はクリストバライト (cristobalite) に轉換す。

炭素含有珪石を伴ふ鑄石の如き原料の浮游選鑄 No. 2,211,686 出未詳 許 1940. 8.13

American Cyanamid Co. (發明者 Robert B. Booth)

[特徴] 浮游し得べき金屬又は金屬化合物と、微粉狀の殆ど無價値の非金屬含有珪石(此は浮游選鑄に對し有害な作用を及ぼすのを常とする)とより成る原料にして、硫化モリブデンを殆ど含まざるものに就ての浮游選鑄法。該原料に珪石を除かずに凝集劑と共に浮游選鑄を施し且有效量の或染料によつて該珪石を抑制す。但本染料は「太陽黃」(sun yellow) の如き carboxyl, sulphonic 及び其等の鹽類より成る群中に包含さるゝ可溶化群 (solubilizing group) を含む。

鋼屑よりピレットを造る法 No. 2,211,984 出未詳 許 1940. 8.20

Alexander Paterson

[特徴] 適當の溫度に於て鋼屑を還元して、鋼塊上の bale を造り、この bale は無垢の鋼の密度の 40% 程度の密度を有す。この密度は自己を保持し得る塊をなすのに充分であり、且該 bale を其後壓延するのに充分な安定性を與へる。次いで本 bale を適當なる溫度に於て壓延してその密度を増加し適當な形のピレットとなし終に熱間仕上壓延をなして工業規格外の鋼製品を造る。

酸化鐵鑄石中に含まれるニツケルの回收法 No. 2,212,459 出未詳 許 1940. 8.20

Kenneth M. Simpson

[特徴] 比較的少量の酸化ニツケルを含む酸化鐵鑄石から殆ど純粹なるニツケルを回收する方法。本鑄石を選擇的に還元して酸化ニツケルの大部分を還元しても酸化鐵の還元が遅れる如くす。還元

した鑄石は 40~80°C の溫度に於て CO を以て處理し、ガス狀鐵カーボニルを比較的少量含めるガス狀ニツケルカーボニルを形成し、次に鐵カーボニルをニツケルカーボニルより分離したる後、ニツケルカーボニルを分解して殆ど純粹なるニツケルを造る。

カルシウム及びマグネシウム 其他の金屬 No. 2,213,170 出未詳 許 1940. 8.27

Dow Chemical Co. (發明者 Jone S. Peake & Charles E. Nelson)

[特徴] カルシウム及びマグネシウム其他の金屬を製造する方法。35mm.Hg の壓力下に保ちたる爐中に金屬含有裝入原料を加熱し、之より該金屬を蒸氣として發出する。この爐はその斷面積よりも小なる斷面積を有する通路を具へ、本通路は爐の内部と通じてある。通路中に導入せられるガスは通路中の蒸氣の流を抑止するに充分であるが、爐を通じて金屬蒸氣の流を指導するには不十分な分量である。

鉛より蒼鉛を除去する法 No. 2,213,197 出未詳 許 1940. 9.3

American Smelting & Refining Co. (發明者 Jesse O. Betterton & Yurii E. Lebedeff.)

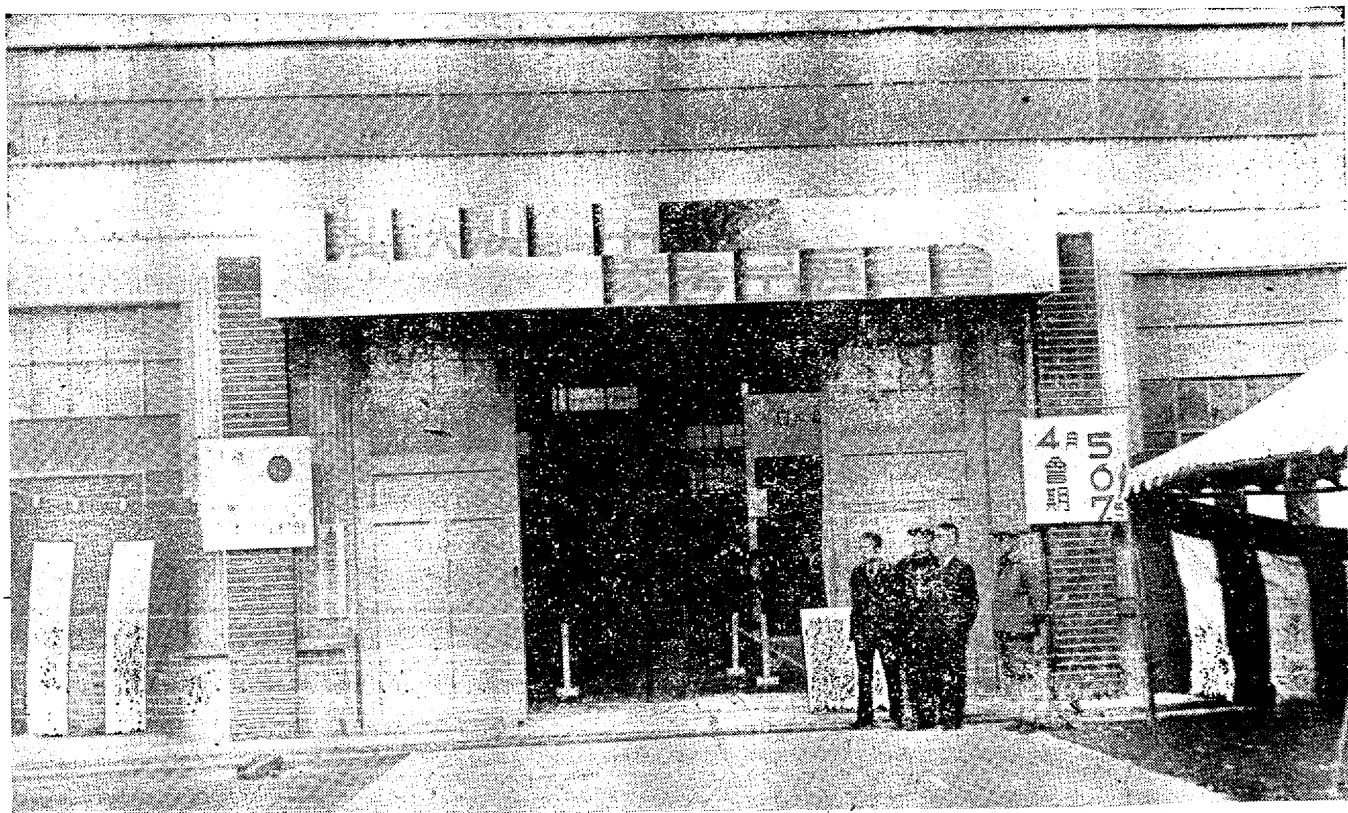
[特徴] 蒼鉛を分離し難い状態から除去し易い浮渣に轉換するやうな膠、澱粉又は銅屑の如き變容劑を、蒼鉛含有鉛の熔湯中に投じ共に加熱しかくして生じたる浮渣を除く。

鋼軸用軸受其他金屬製品の熱處理法 No. 2,213,241 出未詳 許 1940. 9.3

Ohio Crankshaft Co. (發明者 Francis S. Denneen, W. C. Dunn & C. N. Mitchell)

[特徴] 加熱電極の如き並置せる加熱體により被處理表面帶域を加熱し、急冷の爲該加熱體と被處理面との間に燒入劑を注入し、燒入劑を噴射し、次に被處理面と加熱體との間の空間に再熱媒體を流入せしむ。

日本鐵鋼協會製鐵製鋼用參考品展覽會場正面 (第 498 頁參照)



雜 報

大東亞戰爭日記摘要

2月20日 帝國陸海軍部隊は緊密なる協同の下に2月20日未明チモール島クラン及びデリー方面に敵前上陸を敢行。

帝國海軍航空部隊は2月19日濠洲本土北岸敵最大の空軍基地ポート・ダーオンに對し大舉大攻撃を敢行し、所在敵航空兵力並に在港敵艦船を覆滅、更に陸上の重要軍事施設の大半を爆破した。

2月21日(午後3時15分發表) バリ島方面海陸協同作戰實施中帝國海軍水雷戰隊所屬〇〇驅逐艦驅逐艦2隻は2月20日午前0時同島東方ロンボク水道にて巡洋艦2隻、驅逐艦3隻よりなる敵米蘭聯合部隊に遭遇するや直ちに攻勢に轉じ同40分砲火を開き戦闘10分にして敵驅逐艦2隻を撃沈し、他の1隻を大破せしめ、更に逃走を企てた巡洋艦2隻を急追し午前3時15分再びこれと交戦した。此のとき分離行動中の同隊驅逐艦2隻も急遽南下し來りこの敵を攻撃せしが、敵はわが砲雷により損害を受け倉皇夜陰にまぎれ視界外に遁走した。

2月24日(午後4時15分發表) 帝國海軍落下傘部隊は再び2月20日チモール島クラン附近に奇襲降下し進撃中。

2月28日(午後3時45分發表) 大島島(舊ウエーキ島)海軍部隊は2月24日未明敵航空母艦1隻、巡洋艦2隻、驅逐艦6隻を發見、同島陸上砲臺は直ちにこれを砲撃し、敵巡洋艦1隻に火災を生ぜしめ驅逐艦1隻の艦尾に命中弾を與へ、また所在海軍航空部隊は敵大型巡洋艦1隻の後甲板に爆弾を命中せしめたるほか敵機5機を撃墜し、さらに所在航空部隊の總力を以てこれが撃滅に發進せるも敵は逸早く遁走したり。

3月1日(午後4時發表) (1) スラバヤ方面海軍作戰部隊は2月27日薄暮より28日未明までに敵米英蘭聯合艦隊に屬する巡洋艦3隻、驅逐艦6隻を撃沈、巡洋艦4隻を大破せり(本海戦をスラバヤ沖海戦と稱す)

(2) バタビヤ方面海軍作戰部隊は3月1日早朝米大巡1隻、濠巡1隻を撃沈す。(本海戦をバタビヤ沖海戦と稱す。)

3月3日(午後5時30分發表) 2月27日より3月1日に至るスラバヤ沖、バタビヤ沖兩海戦に於ける戦果下の通り。

(1) 撃沈せる敵艦隊主力 ヒューストン米甲巡、エクゼター英甲巡、パース濠乙巡、ホバート濠乙巡、デ・ロイテル蘭乙巡、ジャバ蘭乙巡。

(2) 其の他撃沈せるもの、潜水艦7隻、驅逐艦8隻、(内2隻大損傷擱坐)、砲艦1隻、掃海艇1隻。

3月6日(午後3時發表) 特別攻撃隊員の戦死者に對し昭和16年12月8日附特に次の通り二階級を進級せしめられた。

| | | |
|---------|--------|---------|
| 任海軍中佐 | 海軍大尉 | 岩 佐 直 治 |
| 任海軍少佐 | 海軍中尉 | 横 山 正 治 |
| 同 | 同 | 古 野 繁 實 |
| 任海軍大尉 | 海軍少尉 | 廣 尾 彰 |
| 任海軍特務少尉 | 海軍一等兵曹 | 横 山 薰 範 |
| 同 | 同 | 佐々木直吉 |
| 任海軍兵曹長 | 海軍二等兵曹 | 上 田 定 |
| 同 | 同 | 片 山 義 雄 |

任海軍兵曹長 海軍二等兵曹 稻 垣 清

〔備考〕 特別攻撃隊の壯烈無比なる眞珠港強襲に關しては、既に公表せられたる處、此の全世界の心膽を寒からしめたる攻撃の企畫は攻撃を實行せる岩佐大尉以下數名の將校の著想に基くものにして、數箇月前一旦緩急あらば之を以て盡忠報告の本分を盡し度と案を具し、秘に各上官を経て聯合艦隊司令長官に出願せるものなり。聯合艦隊司令長官は慎重検討の結果、成功の確算あり、收容の方策亦講じ得るを認め、志願者の熱意を容るゝこととせり。

(中略) 實行に當りては收容に關し萬全の方策を講ぜられたるは勿論なるも、敵主力を攻撃したる後は警戒一層至嚴を極むべく海底に横たはる沈没敵艦の殘骸を縫ひ狭長なる水道を通過猛烈なる反撃を脱過歸還することの困難は豫想に難からず、萬一に備へ自爆の準備を整へたるは帝國海軍々人として當然とする處なり。

斯くて 御稜威の下天佑神助を確信せる特別攻撃隊は某月某日枚を啣んで壯途に就き、眞珠灣目指して突進し、沈着機敏なる操縦により嚴重なる敵警戒網並に複雑なる水路を突破全艇豫定の部署に依り、港内に侵入或は白晝強襲を或は夜襲を決行、史上空前の壯舉を敢行、任務完遂せる後艇と運命を共にせり。

就中夜襲に依るアリゾナ型戰艦の轟沈は遠く港外に在りし友軍部隊よりも明瞭に認められ、12月8日午後4時31分(布哇時間7日午後9時1分)即ち布哇に於ける月出2分後眞珠港内に大爆發起り、火相消滅、之と同時に敵は航空部隊の攻撃と誤認せるものか熾烈なる對空射撃を開始せるを確認せり。又同日午後6時11分(布哇時間午後10時41分)特別攻撃隊の1艇より襲撃成功を無線放送、午後7時14分以後放送杜絶、同時刻頃自爆若くは撃沈せられたるものと認めらるゝものありたり。(中略)。

出發に際しては攻撃終了せば歸還すべき命を受けありしも、遂に歸還するものなかりしは或は味方航空部隊の爆弾、魚雷雨下しつゝある敵艦に肉迫(史上類例なき至近距離)強襲し、或は長時間海中に潜伏月出を待ちて露頂し、晝間攻撃による損傷少く敵主力艦を確認攻撃したる等全隊員生死を超越して攻撃効果發揚に専念し、歸還の如きは敢て其の念頭に無かりしに依るものと斷ずるの外なし。

斯の如く古今に絶する殉忠無比の攻撃精神は實に帝國海軍の傳統を遺憾なく發揮せるものにして、今次大戦史劈頭の一大偉勳と云ふべし。

3月8日 皇軍ランゲンを完全占領、ニューギニア島へ敵前上陸。

3月9日 ジャバ島の敵無條件降伏す。

3月13日 東條陸相、陸軍偵察機の製作者三菱重工業株式會社名古屋製作所及び同社名古屋發動機製作所に對し表彰式を行ふ。

3月27日 蘭印軍スマトラ總指揮官のオブヒャーカー少將はクタラビヤに於て帝國陸軍部隊に降伏せり、こゝに赫々たる戦果を以て全スマトラを裁定せり。

工業品規格統一調査會における3月中に開催の委員會並に其の議題

1. 第1部第2委員會第1小委員會(19, 20)

ホワイトメタル、アルミニウム合金分析方法(以上第1部關係)

2. 第2部第12委員會(25)
時計油
3. 第2部第13委員會(25)
油性及び酒精溶性フェノールレジジン規格
4. 第2部第18委員會(26)
防水綿帆布
5. 第2部第21委員會(5)
色
6. 第2部第26委員會(18)
耐火煉瓦・外12件
7. 塗料規格に關し塗裝組合と塗料工聯との協議會(16)
(以上第2部關係)
8. 第3部第2委員會(23)
鉛及びアルカリ蓄電池安全燈、安全燈用電球
9. 第3部第4委員會(20)
安全燈用キャプタイヤコード、標識燈用電線
10. 第3部第5委員會(19)
珪素鋼板、同標準磁器試験
11. 第3部第14委員會(23)
漁業標識燈、同用電球
12. 乾電池に關する打合會(9)
13. フェノールレジジンに關する打合會(24)
14. 自動車用電球に關する打合會(26)
15. 安全燈用キャプタイヤコード外3件に關する打合會(2)
(以上第3部關係)
16. 第4部第1委員會(6, 31)
叩スパン、ねぢ記號
17. 第4部第1委員會第3小委員會(17)
ねぢ用限界ゲージ
18. 第4部第2委員會(12)
フランジ規格中改正
19. 第4部第4委員會第2小委員會(20)
フライス外5規格案に對する各方面の意見、内丸フライス及び外丸フライス
20. 第4部第9委員會(4, 26)
樹
21. 第4部第12委員會(10)
自動車用中舌付座金 外6件
22. 第4部第13委員會(16)
機械電弧熔接工資格檢定
23. 第4部第15委員會(13)
鋼球
24. 第4部第16委員會(3, 24)
工作機械に用ふるネヂ、横中ぐり盤精度檢査
25. 第4部臨時第5委員會(2, 18)
アンモニヤ壓縮機
26. 自動車部分品に關する打合會(19) (以上第4部關係)

各國時局情報

(外務省通商局日報抄)

英勞力不足に備へ5百萬の婦人を登録

—開戦後の婦人労働者既に150萬—

3月6日 タイムズ所報

5日下院で労働省政務次官は、婦人の登録を1901年の年齢グループ迄擴張する旨、及青年組織(Youth part time)の下に16,7歳の少女の登録、彼等に對する責任は各地方教育當局が取る、18,9歳の少女の登録を總て開始すべき旨を聲明し、更に大要次のやうに述べた。(以下略、3月19日)

産金事業中止説を繰る米、阿當局の意見と新聞論調

3月6日 ファイナンシャル・ニュース所報

「英帝國が米國から輸入する軍需品補給は今や金に依つて記入される必要が無くなつた。米政府は金鑛採掘事業を縮小することに賛成である」との噂が最近數ヶ月來流布して來た。然るに「米國は、南阿に於ける軍需鑛産物の生産擴充及び船積量増加の目的を以て、近く經濟使節團を南阿に派遣する豫定である。之に依り南阿は其の金産を縮小し、其の機械及び勞働力の一部をより緊急な軍需生産部門へ振向けられるものと期待されて居る」との報道が3月5日ニューヨーク、ロイター電として報ぜられた。之が爲ロンドン市場の南阿金鑛株は一齊に暴落した。(中略、南阿は現在クロム及びマンガニ鑛石の大産出國となつて居り、又或る程度の重要性を持つた鑛工業も有して居る。1939年度はクロム鑛18萬4千噸、マンガニ鑛38萬8千噸を生産した。石炭の生産高は千8百萬噸に上つたが、其の大部分はバンカー用として使用された、其の他にも工業用ダイヤモンド、アスベスト、マグネサイト、錫が生産される。(下略)(3月19日)

米國自動車工業の軍需工業轉換問題

アメリカ自動車工業の軍需工業への轉換問題に關し、エコノミスト誌第5,136號及び5,139號は次の如く述べて居る。

アメリカ自動車工業の軍需工場への轉換は夙に要望せられ、既に2箇年餘を經過したが、未だに容易に進捗しない。其の理由は一部は技術的困難の點にもあるが、主として大規模經營者が從來の民需需要生産の易きに馴れて、極力新規の軍需生産の難きを回避しようとしたことにある。即ち労働者がC.I.O.に屬するU. A. W. (United Automobile Workers)のルーサー案に基き、専ら轉換に伴ふ失業を回避する目的を以て既存の設備を最大限度に利用し、既存の労働者を之に充當する全面的轉換を要求すると同時に、其の技術的にも可能な所以を力説したに對し、經營者側は1940年夏迄の本工業に對する軍需注文が3億弗を出でなかつたに反し、民需注文は既に4,50億弗に達して居つた事實に鑑み、全面的轉換を欲せず、最近數年間に互り極度の合理化を遂げた結果、既存工場設備の5乃至10%以上の轉換は、技術的に困難であつて寧ろ既存の工場以外に軍需工場を新設するに如かずとし、政府も亦經營者側の意見に聽從するに至つた。

斯くて東部ミシガン地方一帯に互りクライスラーの戦車工場、パツカードの飛行機用發動機工場、フォードの爆撃機工場等の軍需工場が相繼いで新設されると同時に、既存の自動車工場は依然として民需注文の自動車を生産し續け、所謂「ビズネス・アズ・ニュージュアル」が1年以上續いた。

全アメリカに互る大小1067の自動車工場が眞劍に軍需工場への轉換問題に當面するに至つたのは、1941年の後半期、特に9月以降でアメリカの戦争援助が眞劍となるに連れて、軍需注文が加速度的に増加し、1941年9月には35億3千萬弗に達すると同時に、民需注文も軍需景氣に伴ひ記録的に増加し、1941年の初め8ヶ月の乗用車及び輕トラックの販賣は358萬8千臺に達した爲、原料

の供給が之に伴はず、政府は軍需品製作に依つて民需生産を制限せざるを得ないやうになつた。其の結果 1941 年の夏迄に既に軍需註文の 75% を 56 社に集中し、同年末には更に軍需註文の 53% が 13 社に集中する状態で、中小經營の大部分は全面的轉換か休業を強制せられ、多數の失業者を出したが、之等の軍需註文の集中せる大經營自身も軍需工場の新設が間に合はず、部分的には結局既存設備を利用せざるを得ないやうになつた。

之に對し労働者側は、自衛上 1941 年末 C.I.O を通じて右の轉換に對する關與を要求し、生産管理局も亦之を容れて労働者側 5 名、經營者側 5 名から成る轉換委員會を創設したが、經營者側は轉換計畫に迄労働者が關與するのは經營の社會化であるとして纏らず、結局本年に入り、1 月 10 日に労働爭議調停に經驗のある U.S. ゴム会社の Cyrus Ching を議長とする労働者代表 3 名、經營者 3 名の諮問委員會議が成立した。然し更に自動車工業の轉換を積極的に促進し強制したのは、本年に入り軍需生産委員會の採つた民需自動車生産禁壓政策である。其の目的は民需禁壓に依つて原料を節約すると同時に、否應なしに軍需生産を強制しようとするにある。現在軍需生産委員會を代表して此の轉換指導に當つて居るのはフォードの Ernest Kanzler である。

因に、嘗て價格統制局のヘンダーソンがワシントンに於て新聞記者に語つた所に依ると、(ネイション誌 1941 年 7 月 26 日) 乗用車 1 千臺毎に要する金屬原料は次の如くである。(單位封度)

ニッケル 31,598, 鋼 18,603, 銅 1,493, ニッケル 1,491, 鉛 3,854, 新アルミニウム 1,104, 錫 3,409, 再生アルミニウム 4,599, タングステン 17, 亜鉛 18,603, マグネシウム 14, クロム 5,040
又前記エコノミスト所載統計に依れば、1949 年のアメリカ自動車工業の原料消費量は次の如くである。

| 品 目 | 自動車工業消費量 | 全米國消費量との比較 |
|-----------|-------------------------|------------|
| 仕 上 鋼 | 5,993,000 t | 18% |
| 可 鍛 鐵 | 286,000 " | 51% |
| 鼠 鑄 鐵 | 948,000 " | 14% |
| ゴ ム | 473,000 " | 80% |
| 板 硝 子 | 117,000 ft ² | 75% |
| 皮 革 | 27,077,000 " | 68% |
| アルミニウム | 21,000 kg | 10% |
| 銅 | 110,000 " | 14% |
| 錫 | 10,000 kg | 11% |
| 鉛 | 228,000 " | 34% |
| 亜 鉛 | 76,000 " | 12% |
| ニ ッ ケ ル | 20,000 lb | 23% |
| 綿 | 734,000 捆 | 10% |
| グ リ セ リ ン | 18,200 lb | 12% |
| 材 木 | 175,000 ボード呎 | 45% |

(4 月 7 日)

インド特に東部五州の經濟的重要性

—五州を占領せば殆ど英印完全占領と同一—

4 月 7 日 フィナンシャル・タイムズ及び 4 月 13 日 フィナンシャル・ニュース所報

インドは穀物その他の商品、食料品、黄麻、棉花、羊毛、ヘンプ、材木、脂肪、植物油、満俺、クロム、雲母等の原料資源及び莫大な人的資源の供給地として英國並に聯合諸國にとつて缺くべからざる存在である。唯西海岸のみならずインド洋を繞る濠洲、マレー、アフリカ及び近東を連ねる交通の要衝として戦略的にも重要であるが、特に開戦以來此處に發達せる武器の組立及び製造工場はこれにより中東地方の戰場に對する軍需品補給基地として重要性を極めて

つある。ところが注目すべきことは、前記諸原料の主たる産地が大部分アツサム、ベンガル、ビハール、オリツサ及びマドラスの東部五州に集中して居るやうに、交通及び工業も亦之等の東部五州を中心に發達して居る事である。

一. 人口及び面積

前記五州の面積合計 359,000 平方哩は、英領インドの總面積 1,096,000 平方哩の約三分の一を占め、其の人口合計 1 億 6 千 4 百萬人は英領インドの總人口 2 億 7 千 2 百萬人の過半に達する。

二. 資 源

植物性原料の生産に就ては、五州は英印全産額の約 43% を産出する。亞麻仁はベンガル州及びビハール州で英印全産額の 28%、胡麻は五州で全産額の 50%、油菜及び罌粟は五州で全産額の約 30%、落花生はベンガル州のみで全産額の約四分の三、黄麻は英印全産額の殆ど、ゴムはマドラス州が特に多く、1938 年の英印全産額 418 萬封度の内 345 萬封度を産出する。

鐵礦石はビハール州の獨占到近く 1938 年は約百 40 萬噸、石炭はベンガル、ビハール及びオリツサ州で獨占到近く合計 2300 萬噸 (1937 年)、銅は主としてビハール州から産出、マグネサイトはマドラス州から産出する。雲母はビハール州及びマドラス州から産出する。石油資源は極めて貧弱で、現に開發されて居るものはヂズボイ附近のアツサム石油會社所有の油田 (年産額 28 萬噸, 1272, 1938 年) 及びパンジャブのアトック石油會社所有のヅフライン油田 (年産額 8 萬噸, 1938 年) の 2 箇所に過ぎぬ、従つてインドの石油需要の大部分を満すに足らずビルマ及びイランからの輸入に依つて居る。

三. 工 場

前記五州の

(イ) 機械工場數合計 402 中、アツサム州 22, ベンガル州 258, ビハール州 47, オリツサ州 4, マドラス州 71 であつて、英領インドの合計 780 に對して約 52%。

(ロ) 鑄鐵・鍛鐵工場等合計 37 中、アツサム州 2, ベンガル州 12, ビハール州 10, マドラス州 23, 英印全體の 157 に對して 24%。

(ハ) 化學工場合計 17 中、ベンガル州 15, マドラス州 2, 英印全體の 26 に對して 65%。

従つて全體の約半數は東部五州に集中して居る。

尤も全體としてはインドの工業の發達程度は今尚低い。此の發展を阻止したものはフィナンシャル・ニュースの記者に依れば、國民會議派と同教徒との抗爭及び之等二大政黨とインド政廳の軋轢であつた。インド産業の近代化を多少とも促進したのは今度の戦争であり、特に經濟特使を派遣し、貸與法に依る經濟的援助を供與したアメリカであつた。最近の調査に依れば、開戦以來資本金額 870 萬磅に達する約 20 の軍需品工場が新設され、小規模の武器は略々自給程度に達し、飛行機の組立工場も完成した。又製鋼業が高速度鋼品の製造に成功して以來、商船の建造規模が擴大し、装甲車、機關車及びレール其の他車輛が生産されるに至つた。

四. 交 通

東部五州の諸港に輻輳する船舶噸數は次の如くである。(單位千噸)

カルカッタ港 4,602, チトコリン港 1,041, マドラス港 2,070, チッタコング港 504, ビザガバタン港 331, 合計 8,548

即ち五州の合計は 8,548 千噸であつて、全印諸港出入船舶噸數 19,088 千噸の約 45% に達する。特にカルカッタはインド最大の産

業都市であると同時に全印交通の要衝である。

ところが之等の東部五州は今やビルマに進駐して居る日本陸軍、ベンガル灣に現はれた日本海空軍の直接の脅威に曝されるに至つた。之等東部五州が一度西進する日本軍の占領する所となれば、インドは経済的には殆ど完全に占領されたと同一の事態に達着するであらう。(4月23日)

インド軍需重工業の現状

17日 カルカッタ發 B.U.P

4月18日 ガーディアン所報によれば、カルカッタ週刊紙主筆タイソンはインド軍需生産調査の結果を發表したが、その要旨は次の通りである。

インドの軍需重工業は開戦以來 25%の擴張を見た。その 3/4はベンガル州及びビハル州方面に集中してゐるが、同方面の鑛工業は鐵、鋼鐵、石炭、雲母、マンガン、石油等を含み、スエズ以東何れの諸國よりもインドは多くの軍需資材を生産してゐるが、目下の主たる困難は熟練工と輸入原料品の不足である。戦前におけるインドの工業は主として下請け労働或は外國製機械の修繕であつたが、今では Shell cap 信管、水雷を生産してゐる。その他装甲車生産、工業、自動車組立工業も存在し、飛行機組立に従事するものも一つある。

1943年末までにインドには前回大戦末におけるインド兵の數と同じ程度の戦闘用の車輛が出来るであらう。(4月28日)

アメリカ工業の一般情勢 (1月)

米國有力銀行筋の調査報告を綜合するに、アメリカの1月中に於ける一般工業情勢は次の通りである。

- (1) 戦時體制への産業の轉換によつて生ずる失業者は軍需工業方面に漸次吸収され、就業労働者は1942年末は千5百萬人、1943年末は千9百萬人すなはち、各年約500萬人に達する見込みである。
- (2) 鐵鋼業の操業率は94.7%で、前月よりも幾分降下したが、右減退の主要な原因は屑鐵の不足と不急民需品の注文取消しにあるものと見られる。
- (3) 自動車工業の軍需品引受額は現在90億弗(1941年は約30億弗の自動車と23億弗の武器)である。尙戦事繼續中に一般に割當てられるべき新自動車ストックは僅か48萬臺程度であるにも拘らず、現在登録使用中の乗用車總數2千9百萬臺の約3分の1はすでに7年以上使用した古車であるから民間自動車の製造制限を緩和する必要があると唱へられる。(下略、4月28日)

業 界 雑 報

**鐵鋼統制規則公布
需給統制規則改正來月から實施**

鐵鋼の生産、配給、讓渡、使用または消費に關しては從來輸出入品臨時措置法に基づく鐵鋼需給統制規則により法的統制を實施してきたが、時局の進展は在庫鋼材の活用、鐵鋼需給の計畫化に伴ふ切符制度の改訂及び鐵鋼統制會設立などの新段階に到達するに至つたので商工省では鐵鋼統制を合理的かつ完璧ならしめるため今回鐵鋼需給統制規則を廢し、新たに物資統制令に基づき省令鐵鋼統制規則を制定し28日公布、來る4月1日より實施する、從來の統制との主なる相違點は

- 一、在庫鋼材の活用ならびに鐵鋼の計畫的保有——需要者の入手し

た鐵鋼は過剰在庫鋼材の活用をはかるため統制會社または重要物資管理營團に對して讓渡することを自由とし、さらに必要あるときは過剰鐵鋼所有者に對し右の機關に對し讓渡せしめ得ることとした緊急の場合には鐵鋼の計畫的保有をなすべき體制を整備す

- 一、切符制度の改訂——從來の鐵鋼割當證明書は一定の時期を限界として無効とし新株式鐵鋼割當證明書を發行せしむ
- 一、鐵鋼統制會設立に伴ふ事務調整——消費割當實施事務を鐵鋼統制會をして行はしめ商工大臣の決定した消費割當は鐵鋼統制會をして各需要統制機關に通知せしめ、提出書類は鐵鋼統制會を経由せしむ
- 一、鐵鋼の範圍および一元的配給統制の範圍の變更——磷の含有量1萬分の3以下の銑鐵および炭素含有量千分の6乃至8.5の線材は統制を行ひ、鑄鐵管は除外する、軌條、外輪その他特殊のものは原則として一元的配給統制の範圍内に置く
- 一、鐵鋼使用承認書制度の廢止——從來の鐵鋼使用承認制度を廢止し鐵鋼製造用原材料として使用する場合は鐵鋼の自家使用はすべてそれぞれの用途に應じたる需要統制機關において發行する鐵鋼割當證明書による。(大朝3月28日)

機器用の鐵鋼資材發註認許可書處理方針

4月4日機械局長より通牒を發した(4月5日抄)

熔鑄爐の標準型決定

企畫院の肝煎りで熔鑄爐標準型式決定の研究會は7日正午丸の内會館で科學動員協會主催の下に開催

依(日鐵)、葛(同)、遠藤(同)、梅根(昭和製鋼)、中田(日鋼)、里村(鐵鋼統制)、吉川(東大)、齋藤(京大)の各權威出席の上、種々研究を重ねた結果標準型内容積を1000m³と750m³の二型に結論を見たので更に9部門に大別して詳細研究討議を行つたが近く正式決定を見次第、企畫院が今後の工業日本で製作する熔鑄爐の標準型として推賞するもので

從來の熔鑄爐は分厚に過ぎる傾向を示してゐたのが今度から厚さを狭めることによつて戦時下の熔鑄爐製作に物資を浮き上らせる結果となる。(東京報知4月10日)

昭和製鋼海綿鐵製造を企業化

近く鞍山に設備を建設し弓張嶺の鑛石により93~96%の純鐵を有する海綿鐵製造に着手すること。(4月19日)

石碓鐵山扨出鐵 (大朝4月20日)

日本高周波重工の精鍊法の轉換

從來の高周波電撃法より低周波電撃法に移るべく城津、富山共に設備資材に模様替へを行ふと云ふ。(4月20日抄)

住友金屬和歌山製鐵所

住友金屬工業に於ては和歌山市に製鐵業を中心とし副産物處理をも企圖する一大重化學工業地帯を建設中なるが其の第1期計畫に係る製鋼部門(完成は昭和18年の豫定)の一部はすでに完成し來る6月から操業を開始することとなつた。猶全部の完成は昭和21年頃であつてその特殊鋼部門は日本最大、普通鋼は日鋼に匹敵する程度の模様である。(4月28日抄)